

Chapter 06:最後の課題

会社存亡の危機を迎えた三原は、いつもの公園を何度も訪れて福山を待ったが、今回はなかなか会うことができない。
そんな時、商品仕入れのために街を歩いていると、福山と思われる紳士を見かけた。上質なスーツを着こなし、黒塗りの大きな車から出てきた姿は全く別人に見えたが、その面影に三原は駆け寄って声をかけた。



すみません。福山さんではないですか？



やあ、あなたですか。
事業は順調ですか？



いいえ。
とうとうデジタルブラック社がうちの戦略と同じ
ウェブサイトを立て上げてきて、
メイン商品を半額で販売する手段に出てきました。
だから、うちの売上はまた低迷してきて・・・



それは大変ですね。
話は歩きながらでもいいですか？



ええ・・・。



今度は小手先で解決できる話ではなく、抜本的な問題ですね。



なにか打つ手は？
安く仕入れるルートは僕も探してみたんですが・・・。



価格競争はお互いを疲弊させ、誰にもメリットを生み出しません。
だから、この競争には絶対に乗ってはいけません。

福山と三原は会話をしながら、あるビルの中へ入っていった。
福山がビルの受付に近づくと、受付の女性をはじめとして
そこにいる全員が立ち止まり次々挨拶をしてくる。
会話に夢中だった三原も、思わず受付に掲げられた会社名のプレートを見上げた。

その会社は、電子マネー決済で世界有数の会社であり
ITベンチャーとしても日本を代表する会社であった。



あの・・・。
もしかしてあなたは、この会社の代表ですか？？



いいえ、今は違います。
私は創業者で、現在は引退して後進に会社を任せています。
今日は株主総会があるので寄っただけです。



僕・・・そんな立派な方だとは知らなくて・・・！
いままで厚かましく色々アドバイスをしてもらって・・・
すみませんでした！！



まあまあ。そこのソファに腰掛けませんか。



え、ええ・・・。



いまのあなたは、ネットビジネスが何たるかをほとんど理解しています。



アドバイス通りに、がむしゃらにやって来ただけですけど・・・。